

大阪の生活史

— 内容見本

本文より冒頭部分抜粋

もう正直邪魔くさいわほんま……耳いらんねんやったら残せよって
思うもん

聞き手 石浦光代

—喫茶店はどう、前も別で働いてたけど。

ほんま常連の、ほんまになんやろ、クセが強い(笑)。めっちゃクセ強いし、ほんまなんやろ。でもあたし渡辺さんと北陸に旅行行ったりしたやん。

—(笑) あれなんでなん。

渡辺さんは、めっちゃ目が、糖尿でほとんど目が見えへんくなっちゃってて、でいつもは介護してくれてるひとに頼んで、あのー北陸に里帰りするねんやんか。でもそのときは誰もおらんかったんやって、行ってくれる人が。だけど墓参りは行きたいから、ちよつとバイトやと思って一泊でついてきてくれへんかって言われて。一泊? って思ってたんけど(笑)。

めっちゃおじいちゃんや、こないだ歳聞いたら八〇なつたて言ってたから当時七四、五やっただと思うねんやんか。私はすごい個人的に楽しいしおもしろいおじいちゃんが好きやっつてんな。まあ元ヤクザみたいなかんじやねんけど。今もヤクザと思うねんけど(笑)。

—えー! 今もなん(笑)。
たぶん(笑)。ちよつとあんまり表立って言えへん仕事してはると思うねんけど。隠居やと思うで、今は隠居やと思うけど。で、まあそのひとつについて、あれは福井までついてたんやな。あれあたしなんぼもらつたんやっけ……あれあたし一泊行って、バイト代五

万もらつたんやろかな。

もちろん宿泊費とかは全部そのおじいちゃんが出てくれてて、お墓参りついていくのんとか、おぼつかへんから、足元が。ほんでその墓行くまでがめっちゃ石だらけで足元が。ほんで雨も降ってたし。だからめっちゃすごい感謝されて、「来てくれて良かった」って(笑)。空子がおらんかったら俺ほんまに墓参り来られへんかった」って(笑)。ほんでその渡辺さんの友達、中野さんてひとがいて、そのひともヤクザやねんけど。その中野さんのお母さんが九十なんぼで施設に入ってて、そのお母さんを見舞に行きたいからついてきてくれて言われて(笑)。

—えー! え、知り合いのお母さん?

知り合い。そうそう、渡辺さんの知り合いのお母さん。あたし全然知らん(笑)。その知り合いも知らんしそのお母さんなんかもちろん知らんし(笑)。

そういうひととのつながりとかふれあいとかあつて、特殊やんなあつてかんじやねんけど。喫茶店のもちろんオーナーっていうかマスターにも、「お客さんからこんな言われたんですけど行つていいですかねー、休みもらつていいですかねー」つつたら、「まあ渡辺さんが言うんやつたらええかあ」みたいな(笑)。

そう、だからちゃんと信頼関係が一応あるなかでのそういうこと

があつたんやけど。おもしろい。そういうことがありました。一けつこういゝろんな年齢層のひとつが来んのかな。

めっちゃ年齢層は幅広いと思う。でもほぼ八割方が高齢者ですよ。どういふあれで来るんやろみんな。

だいたいでもみんなほらタバコとか吸うんや。いまだにタバコ吸うひとつてやつぱりちよつとなんか昔ながらのヤンチャ系のひとつが多かつたりとかするから。

いまだにその、なに、ガンから復活したひとつは、毎日パチンコ行つてたりとかしてて。でパチンコで獲つた景品とかを「これなんか息子ちゃんにやりー」つておかしとかくれたりするねんやんか。くれるけど、こないだちよつと辛めのおかしとかやつて、これまだ食べられへんわつて思つて夜野さんにおけたけど(笑)。

仕事上でああしんどーつてなるのは、マルチタスクつていうか、やつぱけつこういろいろ動かなあかんつていうしんどさはあるけど。でもそれはあたしは動くのは好きやつたりするから。もの作んのかも好きやし。接客とか好きやし。ああ二階に上んのはしんどいな、階段で。歳やから。まあ、変なお客さんもたくさん来ますから。

ほんま、いつも思うのは、なんかスタバとかやつたらあれやねんけどさ。個人経営の店で、開店と同時にもうなんか自動ドアの前でもう鼻くつつくらいの距離で待つてるひとつがおるわけよ。はよ開けろみたいな、圧がすごくて。

でそのひとつが入つてきた瞬間、「いつものお願ひします」とか言つて。全員がまあ「いつもの」やねんけど(笑)。だからまあ新しく入つてきたひとつは、「いつものつてなんですか」から始まるねん。それぞれの「いつもの」を覚えるのがめちゃ大変やつてー。

パンの耳カットと、バター多め、バターなし、耳アリで、とかな

……「耳アリで！」とかあるねんで(笑)。耳切つてもうてたつてなつたらもつかい焼かなあかんからな。普通のモーニングのトーストの全部耳ナシとか、耳アリとか、バター塗らんとつてほしい、バター多めがいい、あと半分バター、半分ジャムとかな。そんなわがまま通していいの？つていう(笑)。一見さんはそんなこと言うてけーへんで。でも昔つて通つてるひとつは全部言うてくるから。全部言つてくるんです、すごいやろ。

いや大変そう、ほんま。

でもそれをマスターしていつて、覚えて、お客さんにも覚えてもらつたら、ああなんか働いててよかつたなつて思つたりするんかなつていう気はするけどね……もう正直邪魔くさいわほんま……耳いらんねんやつたら残せよつて思うもん(笑)。

あとなんかサラダもドレッシングなしとか。サラダなしで、でもみかんは要るとかあんねんやんか。てかモーニングつて、そもそもパンとサラダとゆで卵と、まあドリンクやねんけど、その中でパンと卵だけでいいとか、言つたりとかするねんやんか。もう家で食べたら？つて思う(笑)。自分で作りつて思つてしまふ。性格が悪い。(笑) けつこう近所で働いたよねえ。

けつこう網羅しててと思うよ。あの、コンビニとかも近所やつたし。もうつぶれたけど。あとは一駅離れたところも多いなあ。ケーキ屋さん、喫茶店、パチンコ屋やな。パチンコ屋なんか二店舗はしごしてるからな。

スーパーで働いてたときも、あれも相当な地元。あれ働きたしたんつて私何歳やつたかな。一六か一七やつたかな。よそで働くことの最初やつたな。あんどきパートやつたしな。おばさんたちと一緒にちよつとした日帰りの会とかも行ったつてたで(笑)。でも結

(……)

じゃあ別に、本当に手術します、切ります、になったときに別に捨ててなくてもまあいい。それはそれでね、話のネタとして面白いやん。永遠の童貞ですって

聞き手 井上瑞貴

—生まれも育ちもあの辺？

そう、全部西成。

—小学校も中学校も地元なの？

そう、地元。

—その学校も公立でずっと。

うん。

—へえ。で、高校も近く？

高校はねえ、あの、F町。J Rの近くにあったやつかな。そこがこう、デザインとか、ゲームプログラミングの専門の専修学校。

—そっかじゃあ、高校生の段階で専修学校に入ってる。

うん、入ってる。専門学校のほうはそのまま同じくG専門学校。

専門学校の二年とかかな、あたりでずっと続けてたコンビニヤめて、ウェブサイトの作る専門のアルバイトを始めたのがそのぐらい。まあねえ、卒業して正社員になる予定やったけどねえ。

—なんかあったん？ それで。

卒業する二カ月前の一月、会社事情って言われてなしになっちゃって。んで結局辞めて、コロナかな。

—そっか、わりと出てすぐになるんか。

そう、四月に……二月か三月あたりに中国でコロナが出ました、四月あたりで日本にも来ました、当時安倍総理が、未知のウイルス

すぎるから初の緊急事態宣言を発令……。

—そっか、その時期の話か。

そうよ、もう三年くらい前。

—え、ちよつと前まで学生やったみたいな感じするやんそれって。そうよ。そうよだつて三年前学生でしたよ。

—マジかー。そうやんな。

うん、実質今のお店がコロナと一緒に歩んでるから、コロナの歴史イコールうちの店の経歴になる。泣きそう。

—てことは、その時期のお店のことあんまり知らんねんけど、けっこう閉めるときは閉めたん。

あ、うん、全然閉めた。もともと店は平日でも週末でも関係なく五時の店やつたけど、平日、まあまあとりあえず三時あたりで様子見て、とか。週末もそやつたね。あの三人で店回して。

—今までの話やと、わりと学生時代はただのロン毛の男子みたいな印象やんか。

あ、そうそうそう。

—そこから、学生終わってすぐ店入ってるやんか。いつの間に女子

に？

—せやね、きつかけ自体はね、いつやったかなあ。たしか専門学校

の二年の終わり際、とかあたりに、まずあの、その当時は全然男で

ロン毛の男でみたくないな感じで。ファッションにも興味なくて、服なんてダサくなければ着れたら良くない？みたくないなタイプやったけど。で、母親と近所のショッピングモールに買い物行って、要は荷物持ち。で行ったけど、とりあえずレディースのお店入って、母親が見てる間にうちもまだ、と灰色のカーディガン。その当時秋やったから、長袖のめちやくちやロングなカーディガンあつてんけど、それを初めて着たときに「あ、こっちのほうが似合うなあ」みたいな。体型的にはだつて、今と変わらんから。男性の服やとぶつかぶかやから、こっちのほうがピッタリして似合うやんみたいな。そつから興味持ち始めたのがきつかけ。

—へえ。
で、その店通うようになつて。当時はまだそんなに化粧もしつかりしてないし、髪長いけどまあ女性服着てる男性。女装とかに近いのかな、女装か男の娘かわからへんけど。うん、まあそんぐらいやつたね。そこから地道に化粧を覚えてた、つていうぐらいやけどね。専門学校三年のときにはまあまあある程度化粧も覚えて、胸もなんかまあ、ね、当時は靴下詰めたりとか。
—みんなやるよねそれ。

—なんかとりあえずね、パッドとか詰める前にね、靴下とか詰めて丸っこくね、するから。そう、それがきつかけやつたから、まあお店に入る前にはすでにある程度はできてた。

—へえ。えつ、やりたい何かぼんやりしたものがあったん？ もつと手前。

いや、似合うからこうしていいこうみたいなの。で、すごい自分に完璧主義なところがあるから、自分に対してね。他人には向けないけど、自分に対してそれだったから。女性服着るんやつたら、まあ最初は

似合うからって言われたけど、やっぱり着るんやつたらもう女性らしくあろう、つていうのと、気持ちと考えをじゃあコロツと変えてみたいなの。そこから、せやねえ。まあ靴下やけど胸作つて、とかし始める。

最初の頃はね、ただ単に面白かつたつていうのはあるんやけど。友達とこう、スーパー銭湯みたいなど行つたときとかも、あの友達がね、フロントと会話してるから話さなくていいやみたいなの。うーんうーん。

で、友達鍵もらいます、じゃあうちも鍵もらいます。なぜか知らんけど友達は黄緑色の鍵、番号の付いたね。で、うちはなぜか知らんけどピンク色の番号付いた鍵で。まあまあでも番号が全然離れてたから、向こう三〇〇〇番台、うちが一五〇〇とかその辺やつたかな。

ほなたまたま位置関係で違うんやろうなつて思つて、まず男性のほう入ります。いくら探しても三〇〇〇から上しか数字が存在しません。フロント行って「すいません、男性なんですけど……」つて、変えてもらつたりとかねえ。男風呂入つてもみんなから視線集まるし。

—せやなあ。

入つて浴び終わつて、さあ出ますつて、着替えて出ようとした瞬間に男性が暖簾くぐつて、うちのこと見た瞬間に一回外出て暖簾確認して、間違つてないかなみたいなの。「大丈夫、合つてますよ！」みたいな。

—あるあるやな。

ね、あるあるやと思う。あ、せや、入るときもおばちゃんたちに止められたわ。鍵交換してもらつて、緑色の三〇〇〇番台以降の鍵

子どもを持ってかれたのがもうネックになつて、そういうときに知り合つたから……寂しいじゃないですか、ずっとひとりで。飛田の黒電話で毎日しゃべつてました

聞き手 || 金益見

—離婚して大阪に出てこられて。そのあとすぐに飛田で働き始めた。住み込んでたもんで。お金ないからね。

—そのときは三重から出てこられたんですか。

—そうそう、結婚してたから。子ども連れてね。

—飛田って、街並みとかちよつと雰囲気違うじゃないですか。最初に飛田見たとき……。

—いや、びっくりしました……ただ料亭かなと思つて。知らずに入つたんですよ。そんななまいと思つてたもんね、当時は。

—女性週刊誌ね、見て入つたんです。週刊誌に料亭組合つて書いて、その遊郭さんで「料亭組合だから、料理でも運ぶんですか」って聞いた。まさか遊郭がね、いまだにあると思わないから。

—名古屋つてないんですよ、遊郭とか。三重にもないし、その当時全然知らなかったもんで。三重も名古屋もソープランドはあるらしいけど、大阪だけなんです。花博でなくなつたらしんんです。大阪の人が「よそから人が来るから、こんなのは残してたらだめ」つて言つて、ソープランドはなくて代わりに遊郭は残した。

—へえ。花博のときは、まだ大阪にいらつしゃつてないですよ。うん、まだ来てない。あつちでつて二〇代ですから。向こう

(名古屋) で育つてるからね。

—それで飛田にいらつしゃつて、最初料亭かなつて思つたけど違つ

て、それでももう覚悟を決めて？

—いや、まずお金がなかった。三〇円しかなくて、子どもがいた。

—その二つでやつぱ決めた。

—お子さんはその、一緒に面接とか行くとき、泣いたりしませんでしたか。大丈夫でした？

—いや、泣きはしなかった。なぜか連れて行つても。

—かしこい子ですねえ。

—いや、かしこくはないですよ。託児所に預けたら「おーい」みたいに呼ばれるから(笑)。

—「おーい」つて(笑)。

—どこ行くのーみたいなの(笑)。嫌なんですよ、それは。

—「おーい」つて言われて結局ね。ちっちゃいけど、ちっちゃいながらにやつぱり、どこ行くねんみたいなの。だつてずつとこないでしよ、置いてくから。ちよつと行つてくるねつて言つて。お母さん仕事行つてくるねつて別れる、そういうときは嫌みたい。やつぱ、どの子もそうみたいですよ、預けるときつて。

—この前お聞きしたときに、最初は飛田のお店でお子さんと一緒に寝泊まりしてつて。

—寝泊まりしてました。(仕事) 終わつてからお風呂連れて行つて。本当はだめらしいよ、法律ではね。マンションに住ませなきゃいけ

ないのをその当時そのお店で住んでた、お金なかつたから。

—何カ月ぐらい(遊郭に)住まれてたんですか？

—何カ月というより、一年ぐらいいましたね。

—じゃあ、お子さんとは、大阪で一年間は一緒に住めた。

—うんうん二歳のときね、なんとか。で、母親が連れてった。こんなところしたら、わかんなくてもだめだつて言つて、うちの両親

が名古屋に連れて帰つて。

—夫さんの親じゃなくて、Iさんのご両親が？

—うん、まだ元気だつたから。

—そしたら、お子さんはまずIさんのご両親が連れていって、そこから三重の養母さんが？

—そうそう。そこからまた始めて裁判とか……取り合ひ。

—飛田で働いてるつてことは、ご両親にお電話か何かで伝えてたんですか。

—いや。もう母親がもうそういう人で、隠すのが嫌な人だね。風俗

行こうが何しようが嘘だけはつかないでつていう人だつたから……

—もう亡くなつたんですけど。

—だから嘘を言うものすごく顔色も変わつて怒られるから、わから

るんでしょ娘が嘘言つてるの。結局はれるから、いつかはね。だから

もうはつきり言つてました。こういうとこで働いてるよつて。遊

郭つてわかるでしよつて。親は戦時中つていうか、そのとき小学生

だけどわかる人です。

—飛田は昔のままですもんね。それで、その後四〇歳になるまで八

年間飛田で？

—いや、あいだ変わったんですよ。飛田は二年ぐらいかな、おつた

ん。

—その間、いい思い出とかあつたりしましたか。

—いや、いい思い出はないけど、なんか大学生の子が半日いたとか……何にもせずいました。するとかそういうんじゃなくて、なん

か(遊郭が)珍しかったみたいで。多かつたですよ、学生さん。

—学生さんが半日？

—うん。何にもないのに(笑)。

—お金も払つて？

—うん、その当時ね。

—え、どんな話するんですか、そういうとき。

—いや、休みは何してんのか(笑)。単なる世間話ですよ。

—半日も？

—そう、半日(笑)。カラオケもないし、いわゆる布団しか……で、

四畳一間でしょ。ちゃぶ台があつて。

—そこで大学生と半日、ちゃぶ台挟んで世間話して……。

—そうそう。で、「食事は？」つて言うから、もう出前しかないで

すよああいうところは。だから食べに行くわけでもないし、延長代

払つて、結局半日いたのは覚えてる。なんか当時流行つてたみたい

で、大学生の間で。その頃の学生さんが今も四〇代になつてるで

しようね、こちらより一〇歳下だから。

—それで二年で飛田を辞めて、その後はどこに行かれたんですか。

—最初はデイトクラブに行つたんですよ。電話ボックスにこういう

ピラがあつてね。電話ボックスはいま使う人もいないし、梅田に数

カ所残つてはいるけど、なくなつてるでしょ。そこにこういうピラ

があつて、エッチな。

—それで当時、一時間二万二〇〇〇円だつたかな。で、お店と半分

半分。交通費はホテル行くのに往復で二〇〇〇円くらい使うから、

(……)

落ちる、いたららもうスローモーションやで。一五〇トンの大きな

神戸高速の桁がこつちにぐるーつと来て、どすん

聞き手 小林悠子

まだ阪神高速の下が、阪神高速は城北運河埋めてしとるからな。その中へ橋脚立てとるから、どこも一緒やんかこのへん。わしら行つたときまだその運河の水があつたわ。今は下埋めて公園みたいにしとるけどな。あすこ、あんた知らんやろけど守口とこでぐうつと急カーブしとんやがな。あの下が工大（大阪工業大学）や。淀川へぶち当たるからぎゅうつと回つてそれから守口のほうへ行つとんや。あの下にね、夜中だけ開く焼きそば屋があつたんや。

—焼きそば屋？

焼きうどん、焼きそば。お好み焼き屋やな。学生の溜まり場や。夜中まで起きてわあわあ言うとるやろ。腹減るやろ。唯一その店しか開いてない。高くてますい。

おじんとおばんが二人でしよる。汚けなとこやで。で、高いから行けない。先輩におごつてもらいよつた。店の屋号もなかつたんかなあ。ナントカへ行こか言われて、行きまひよか、腹減つたなあ、おごつたるわ、と。もちろんあの頃は先輩いうたらおごつてくれるもんやと思つたらな。割り勘なんて絶対なかつたわ。

学生ばつかりや、きちゃなげな長椅子みたいなとこでおつさんがワーとうどん焼いて、そんなうまいもんでもないのに、ソースまみれのうどんやけど、腹減つとるから美味かった。みんな漫画読んでよ。もちろんいくらなんでも酒なんか飲まれへんしな。そんな金あ

らへんやん。ビールは置いとつたと思うよ。ほいでも先輩がたまにアルバイトで金が入つたらビールぐらい一本出してくれよつたんちやうかな。

—基本金がないんや。

基本金がない。エンゲル係数いうて食費で消える。普通そやろお前。何するの。飯食うだけやん。食うのは食うやん、やつぱりどうしても。わしら行きつけの喫茶店でも、玉子定食いうてもう決まりで、日替わり定食で一八〇円くらいやつたんちゃや。コーヒー七〇円。だから二五〇円ほどや。ほで今から言う大阪駅学生班のアルバイト代が一日二五〇円ぐらいやつたんや。

—それってええの？ 安いの？

ええとか安いとかやなしに、出勤自由。無料パスが、ごまかして乗るやつな、もらえる、こんなええことあらへんやん。通勤パスで判子押してあんねん。京橋・大阪って書いてあんねん。ところがそのパス、もともとは全国パスや。むかし国鉄の人が精動バスいうてね、よう仕事したいうてご褒美に全国の無料バスを配りよつたんや。それと同じ台紙を使とるから、（改札で）見たつてわからへん。改札出る前「ああ苦勞さん」言うてくれるんや。どうも、言うて。それが目当てやんか。

それと、何日に来なさいとか言わない。月に一回か二回、パスを

もらいに行くだけ。たまには怒るわけや、助役室がな。この子ひとつつも来おへんなど。来い言いよつたぞと。ほなまた行くわと。だから国鉄、親方日の丸の感覚やな。JRやつたらそんなことでけへん。ええか悪いかしらんけど、そんなん。それでなんぼもろとつたかなんて計算せえへんもん。

昭和四七年に入学やから、それから四年、五年おつたんやからな。その間に、新幹線が博多まで開業したわけですよ。それまでは岡山までやつたわけ。関西は九州やそちからごつつい仕事しに来るとやんか。盆や暮れ、正月には絶対帰るやんか、それで大混雑やつたわけや。

だから僕らは環状線のアルバイトやつたけど、増務いうて別に募集しよつたわけや、私らの中から。それ行つたらそらすごかつた、人が。ポストンバッグをこう二つ紐でくつて振分け荷物にして。ほいで一時間も二時間も前から並んどるわけや。きたぐにも並ぶし、三時頃出る西鹿兒島行きの高千穂やつたかな、それなんかもう並んどるわけや。私らも誘導して、入ってくるまで三〇分ぐらいずつとその列の先頭に立つとるわけやんか、危ないようにな。

ほなそのおつちやんらと話すわけやん、どこまで帰るん、とか。「人吉よ」とかな。三時五分ぐらいの発車やつたね、あれ。おもしろかつたですよ。乗れないんやから。汽車に乗れない。いっばいで。もつとおもろいことはな、一、二番いうたら福岡山線の下りホームやんか、昔は。今は知らんけど、環状の隣。ホームに案内の詰所があるんやんか。昼飯作りよつたんやから。案内係のおつさんがみんなの昼ご飯を、サラメシやな、作るわけや。時間が空くと、袋持つて買い出しに行きよるわけや。ほいでちよつとしたらな、焼き魚の煙が出て来るわけよ、換気扇からホームに。どんな世界や思たで。

さすがに東海道線のホームそんななかつたと思うけどな。笑たで。魚焼きよるがい、煙がぶわーと。

—えらい時代やね。いま学校もきれいになつとるもんな。

きれいなって、マンシヨンみたいになつとるな。汚いところやつたんや。その代わり安かつた、学費が。一七、八万やつたと思うわ。それはだから親に払ってもらうて。私大の理系は総体に高かつたけど工大は安かつたんや。だから貧乏人がよう行きよつた。

—だから工大なん？

いや、そんなことないで。わしら高校のときもあんまり勉強せえへんかつたけど、理系で工学、理系受けるんやつたらせめて私大やつたら工大ぐらいにしとけよ、下なんぼでもあるで、と。

—大阪で就職したろとは思えへんかつた。

なんも思わへん。勉強もなんもしとらへんから、就職活動なんかした覚えもございません、ほんまに。工大はみんな先生が世話してくれよつたんや。わしらはもうなすがまま。卒研の先生でもう亡くなつた藤原先生がな、小林よ、お前もう山野組にしとけ、て。姫路やしもうここへ行つとけ、知らんぞあとは、言われて。

—それはOBとかがおるから。

いや。ある程度土木の先生もそれなりに就職担当で回るわけやな、会社を。頼みますわ、とか。欲しい言いよるな、とか。工大そんなんやつた。だから工大は就職率がよかつたんや。

わしらが卒業する二年前まではオイルシヨックの前やから、わしらの一つ二つ前の名簿はわしらでも知つとる土建屋ばつかりの就職名簿やつたで。それか、跡継いどるかやな。市町役場とか。それ以外はもうほとんど名前知つとる土建屋やなど。

—ゼネコンでこと。

(…)

んで、なら大阪行って、西成行ってみよう

聞き手 Ⅱ 田茂雄

—お生まれはどちらになるんです？

宮崎県。九州宮崎。

—宮崎なんですか。で、お生まれは？

四六年かな。

—一九四六年ですか。ご家族は？

もういま全然近付いてないから。三十何年ももう離れつきり。一回も帰ってない。

もう噂で親父も、ああ親父はおれおるときに亡くなったけど。お袋も亡くなって。で、きょうだいも亡くなったんやないか。ほんで、長男の息子がもういまはなんか仕切っとるみたいな感じや。

—そうなんですか。で、きょうだいはお兄さんだけですか？

女一人の男七人や。おれ一番末っ子さんや。で、おれの上は子どものときに死んでもうてな。だからおれと上は間がだいぶある。

—宮崎にいた頃の、子どもの頃の思い出とかってありますか？

小学校、三年か四年ぐらいはあるけど、それ以外はもう、ないな(笑)。なんか知らんけどおれはもうずーっと、ばーっと過ぎたみたいな感じがするんよ。思い出もあんまりないねん。

—ああそうなんですか。どんな街でした？ 生まれた場所。

やからまあうちの親父は馬喰しとった。牛とか馬をこう扱う、取り扱う仕事。

—え、ばくろう？

それしとった。馬喰つちゆうねん。二人おつたら二人の間に入って、値段を決める。そういう役目や。真ん中に仲裁入ってな。で、決めるんや。で、あの帽子かなんかかぶって、相手とこう手握ってなんぼなんぼって決めるんや。で、それを成立したら、二人が成立したら、うちの親父に、なんぼなんぼって。で、それはそれでそのくらいでいいやろっていうような感じで決まるんや。それをおれも見とったけど、子どもの頃な。まあ学校の勉強もしゃんかったから。—あまり学校は。

高校には行つたけど。もういろいろあつて中退。一六、一七はもうほとんど遊んどったわ。で、甥っ子が自衛隊入つたんやね。そこの地方連絡部つあるんやけど、遊んどつたらあれやから、自衛隊入らんかいうて、自衛隊入つたんや。

—自衛隊には高校辞めてからすぐですか？

いや、高校辞めてから一、二年はもう遊んどつてん。一七の終わり頃に話が出て。もうほとんど決まり。合格。あの頃は少ないからもう口頭だけで入れるような。

—で、まあ四年おつたんやね。前期と後期を教育受けて。中隊に配属になって。それから、一年半ぐらい都^{みやこ}城^{しろ}におつて、都の駐屯地に。それからみんな北海道に二回行かなあかんかな。若いときに

あの競馬場行って、お父ちゃんと。1-4、1-5のやつこうてな、馬券。当たって。そのままでええのにとおもとってん、あたしの誕生日やから。ほんなら当たって。金魚こうて

話し手Ⅱ金良美 聞き手Ⅱ韓光勳

—コーヒー飲む？

いや、紅茶でええわ。出がらしある。出がらしでええ。

—お湯沸かすわ。これあれやねん。『大阪の生活史』っていう本になるねん。まあ、オンマ(母)の人生を聞くつちゆうことやな。まあげっこう知ってるけどな。

なんであんたが知ってるの。ふふ。

—いや、ところどころ話してくれるやん。

オンマ、播磨の二階で生まれてん。梅南通からもうちよつと南に降りたところにな、間借りしとってん。おじいちゃんとおばあちゃんがあるで、貧乏で。次は津守の家に来るねんやんか。そのとき、姉ちゃんが私と五歳差やから、あの播磨の近くの天下茶屋のとこまでな一人で電車乗って。幼稚園一人でやで。昔の人すごいな、よう一人で行かすなあ。

—オンマ、小さい頃の一歩最初の記憶ってなにか覚えてる？

覚えてる。ひかり幼稚園でな、お昼寝しやなあかんのにな。大体な、人生で悪いことを覚えてるらしいで、記憶で。怒られた。プランコ乗り回しとったから。

ほんで、運動会するときな、あのドラムやってん。もう一人の子が来たら、オンマはドラムやらんでもよかってんやんか。一応、補欠みたいな感じでやってくれとったけど。もう一人の子がやっぱり来

られへんかったみたい。ほんで鼓笛隊の。写真もあるわ。あれや。めっちゃ運動神経発達しとってんやんか。小学校一年とか、二年とか、全部リレーの選手で。地域対抗とか、紅白対抗、学年対抗とかいっばいあつてん、三つぐらい。

—小さい頃、「金本」で通ってたわけやんか。

そうそう。小学校三年のときに「烏川」から「金本」に変わってん。民団に頼んで、戸籍探してもらって、「鄭」を「金」に戻してん。お父ちゃんが「金本」でいって言うて。わたしら女(姉妹)三人は、そんな韓国人らしい名前つけやんかというて言うて。お父ちゃんがやっぱし決めるやんか。金本やって。本貫が金海やから。お父ちゃんが金本やって。

犬飼うてたやつもな、それもカタカナの名前つけてたのに「ハチ」や言うて。それで「ハチ」に決まって。めっちゃお父ちゃんのいうことを聞くねんやんか、怖いから。せやけど、わたしら女のこととは聞かへんねん。めっちゃ怖いねん、その犬。

—チョコ食べる？

一口だけ食べる。かんふに(＝聞き手のこと)、コーヒー淹れるの？

—うん、淹れる。オンマ小さいころ、自分のこと韓国人やとか朝鮮人とか、わかってた？

わかつてた。

—いつからわかった？

結婚式とかでみんなチョゴリ着るやん。それでわかったし。光陽会っていうて。(韓国全羅南道の)光陽っていう、いまのポスコあるやん。そこが光陽郡やってん。ほんであの、指紋押捺やらなあかんやん、昔は。だから。ものすごい腹立った。犯罪者みたいに、指をきゅうって回して、やるねん。

—それ何歳くらい。

—一五か一六。

—指紋押されたんや。

指紋押捺なくなつたやん。民団の力で。

—まあ、みんな運動したから。

運動して。中国料理のおっちゃんかな、民団の近くの。民団のおかげで指紋押捺しやんでええようなつてよかつたわつて。みんな力合わせていろいろやつてくれてるわつて。

ちよつと待つて。ほんでなんか、踊るのが好きやつてんやんか。

—なに、光陽会って？

光陽出身の人の会やつてんやんか。いっぱいおつてん、西成に。

—バスで行つてたもん。

—ああ、そうなん。

宝塚の池の近くで。その辺でとにかく。

—西成の光陽出身の人たちの集まりがあつたんや。

—そうそう、バスでどつか行つて。踊つたり。焼肉食べたり。そんなあつてん。

—何人くらい？

バスやから五〇人は乗れるんちゃう。そこまでは覚えてないけど。小さいころにあつて、ほんでなんかおっさんら酔っぱらうやんか。だからそれがすごい怖かつた。

—おっさんらは韓国語でしゃべるん？

—いや、どうやろ。韓国語か。両方ちゃう。韓国語のほうがしゃべりやすいんちゃう。歳いつてるひとらやから。

—そのときは、韓国人でいつてた、朝鮮人でいつてた？

—朝鮮人でいつてた。

—なんかいじめられたりとかしたことあつた？

—小学校、中学校ではなかつた。多いから、韓国人がすぐく。ほん

で、小学校もあの、日本人に負けたらあかんやんか。だからめつち

や一生懸命勉強した。

—日本人に負けたらあかんつて、誰かに言われたん。

—いや、言われへんけど、自分で思つた。

—なんで。

—負けず嫌いやから。わりと賢いなつて、自分で気づいたときがあ

つたから。なんか中学一年生のときな、中間期末とかあつたやん。

—それで、九〇点以上全部とれたから、五教科で。やつたらいけるん

ちゃうか思つて。でも、女は大学なんか行かせへんみたいな。

—それ、いつ言われた？

—中二の二学期。それから勉強せえへんようなつてん。

—誰に言われたん。

—お母ちゃんに。ほんで、中三のときはそれでもやつぱり勉強せな

あかんと思つて。普通科じゃなしに商業やけどな。商業ならどこで

も行けるつて、先生に言われて。あの、五ツ木の模擬テスト、めつ

ちやええ点とつて。塾行つてる子に、あるやんテキストとつて、なに